

て居るものが澤山ある。著者は前述の態度からであらうが、只だ一應の譯を施しただけで、一切研究には入つて居ない、他日更めて氏の詳細なる研究の結果が公けにせらるゝならば、學界を裨益すること一層大なるものがあらうと思ふ。

第一文書の111に摩尼教の神祇の名を擧げた中に küclüg siin srošrt tngrii なる名が見えて居る srošrt 頃ち srošart は「ムラー氏のペーネヴィ文書中」見ゆる sroš-håray と回一の名でなければならぬ。シャヴァンヌ、ペリオ兩氏が Un traité manichéen, p. 26, note 1 に「チオ氏の説として掲げた所によると、波斯語では *sr-ōšard- だつたらひんらーぬ。」の srošart は或は此の形に出でたものであらうが、自分には何とも判断しかねるが、注意すべし形だと思ふ。sroš-håray はペーネヴィ文書には「強」といふ語を冠せられ、波斯教殘經にも「大力卒路沙羅夷」と記されているが、ハルムトルコ語の küclüg 即ち「力ある」「強き」の語を冠してある。勿論「大力」に應するものであるが、次の siin は何と見るべきであらうか。著者は此の書の前序に於て、 siin といふ神の名はベビロンの月神と見るべいか、或は漢語と見るべきか、立ち入つて決定を試みぬと大事を取つた。之をベビロンの神名と見るゝは此の場合如何であらうか、もしかく見れば次の srošart との關係に困難を生ずる。küclüg siin の一語や srošart に對するアツトリビュートと見るべいはあるまいか、 siin は此の文書に用ゐられたマニ文字の綴字法によると i の一音を表したものと見得るゝと勿論であるから sin と見て、 Körper とか Gestalt とかの意味ではあるまいか、かく見れば此の一語は「強き體軀の」とか「猛き姿の」とかの義と考へられ